

教育研究業績書

平成 17 年 10 月 25 日

氏名

印

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
<p>【著書】 1.情報化社会の地域構造</p>	共著	平成元年 5 月 24 日	大明堂	<p>本書は情報化社会について地域構造の視点から捉えようとする人文地理学の立場にたった論集である。担当部分のうち、第3章では人文地理学からマスメディア研究を行うための理論的枠組みを提示した。第21章では全国的に見てもCATVの普及が進んでいる長野県の県内における普及過程を跡づけ、階層効果と接近効果を軸とした普及構造を抽出した。全文312頁中、担当：第3章「地理学におけるメディア研究のために」(24～33頁)、第21章「長野県におけるCATVの普及とその意義」(231～242頁)。共著者：寺阪昭信、稲永幸男、山田晴通、阿部和俊、中島清、生田真人、北村嘉行、富田和暁、小野純一郎、荒井良雄、伊東理、佐野充、石井廣志、原田榮、高柳長直、青山宏夫、酒川茂、岡橋秀典、宮口迪、若林芳樹、杉浦芳夫、山崎健、土谷敏治、中林一樹、千葉立也。</p>
<p>2.「新版」地域メディア</p>	共著	平成元年 11 月 10 日	日本評論社	<p>本書は技術の進歩と共に発展してきた当時の地域メディアの実態について、学際的な立場から編集された論集である。担当部分は、農村部において公的セクターの関与下に成立するいわゆる「農村型CATV」の全国的な現況を展望した上で、長野県朝日村、および北海道池田町の事例により運営の実状を紹介するとともに、問題点を指摘したものである。全文373頁中、担当：第14章「『農村型CATV』の実態」(267～280頁)。共著者：竹内郁郎、田村紀雄、清原慶子、小玉美意子、大石裕、多喜弘次、児島和人、前田隆正、林 茂樹、松木修二郎、三浦恵次、吉田文彦、山本武利、山田晴通、蒲池紀生、上田裕、渡辺潤。</p>

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
3.ロックの冒険・スタイル篇	共著	平成4年9月1日	洋泉社	<p>本書は、ロック音楽の風俗的側面についてのエッセイを集めたものであり、全体としては学術出版物ではないが、山田の担当部分のほか、上野俊哉、澤野雅樹の担当部分などは、実質的な内容に即して判断すれば学術的内容となっている。担当部分は、ロック音楽とその映像表現の歴史を展望し、メディアの発達とともに映像表現が大きく変化してきたことを明らかにしたものである。全文233頁中、担当：「『見る』ロックと『ロック』する映像」(200～209頁)。共著者：上野俊哉、澤野雅樹、菊池孝広、三田格、水越真紀、松永良平、小沼純一、高島暁、佐々木敦、小荒川淳子、小林善美、及川保、浜田優、井上薫、黒澤毬江、山田晴通、島原裕司。</p>
4.「ユタ日報」復刻版第1巻	共著	平成6年12月8日	「ユタ日報」復刻松本市民委員会	<p>本書は、第二次世界大戦中に刊行が継続された数少ない在米日本語新聞「ユタ日報」について、特に史料価値が高いとされている大戦中刊行分の全頁を復刻した全7巻のうちの第1巻である。担当部分は「ユタ日報」の創刊から廃刊に至るまでの歴史的経緯を概説し、地域紙から事実上の全国紙となり、再び地域紙となった同紙の性格の変遷を整理したものである。全文435頁中、担当：「概説『ユタ日報』-その歴史と意義-」(431～435頁)。共著者：猿谷要、有賀正、神澤邦雄、篠田左多江、山田晴通。</p>
5.フィクションとしての社会	共著	平成8年10月20日	世界思想社	<p>本書は「フィクション」をキーワードに、社会学の諸側面を問い直すという主旨で編まれた論集である。担当部分は、都市をメディアとして捉える立場の議論を紹介し、そのような意味における都市が現実性を喪失する状況について論じたものである。全文260頁中、担当：第4章「フィクションとしての都市」(68～87頁)。共著者：磯部卓三、片桐雅隆、桐田克利、山田晴通、谷口重徳、草柳千草、田原範子、鮎川潤、松田素二、石田佐恵子、今枝法之</p>

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
6.表現する市民たち 地 域からの映像発信	共著	平成 10 年 10 月 25 日	日本放送出版協会	本書は、映像メディア（特に C A T V）を事例に、視聴者、一般市民 の番組制作への参加の実態とその 意義について調査・検討した論集で ある。担当部分は、2 度にわたりテ レビドラマの製作に取り組んだ長 野県山形村の事例について、関連す る兵庫県滝野町の事例とも対比し ながら報告したものである。全文 251 頁中、担当：第 1 章「ドラマ作 りの村-長野県山形村」(43～65 頁)。 共著者：児島和人、山田晴通、嶋根 克己、牧田徹雄、古川良治、藤沢真 理子、宮崎寿子。
7.ポピュラー音楽へのま なざし	共著	平成 15 年 5 月 20 日	勁草書房	本書は、学術的な立場から展開さ れるポピュラー音楽研究を、多様な 様式の研究事例を紹介することを 目指した論集である。担当部分は、 ポピュラー音楽研究という問題の 設定に関する前提的議論として、本 書の導入部に位置づけられている。 全文 366 頁中、担当：第 1 章「ポピ ュラー音楽の複雑性」(3～26 頁)。共 著者：山田晴通、阿部勘一、生明俊 雄、安田昌弘、岡田宏介、増田聡、 矢向正人、細川周平、東谷護、栗谷 佳司、小泉恭子、大山昌彦、辻泉。
8. 東京スタディーズ	共著	平成 17 年 4 月 6 日	紀伊國屋書店	本書は、東京を題材とした新たな 都市論の可能性を多角的に探るこ とを目指した論集である。担当部分 は、近年のポピュラー音楽の歌詞に おける地名表現の減少をふまえ、特 に東京についてのヒット曲がどう 変質し、それがどのような東京観の 変化を受けたものと考えられるの かを論じている。全文 285 頁中、担 当：「脱・地名の歌詞世界の中で」 (175～187 頁)。共著者：若林幹夫、 吉見俊哉、田嶋淳子、五十嵐太郎、 西澤晃彦、田中研之輔、金子淳、石 原千秋、中村秀之、山田晴通、ステ ファニー・デボア、鄭秀娟、イレ ーナ・リフロフスカ、北田暁大、森川 嘉一郎、赤川学、鈴木隆行、永井良 和、南後由和、平井太郎、中村由佳、 石原千秋、田中大介、松井和哉。

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
【学術論文】 1.情報環境の図式—メ ディアの発達は何をもた らすのか	単著	昭和 57 年 8 月	(財)環境文化研究所、昭 和 56 年度自主研究報 告書「生活環境の新視 点に関する研究」	マス・メディアの発達に伴う情報 環境の変質について、中野収らの議 論を比較検討し、環境認知における メディアを介した情報の重要性の 増大傾向を指摘した。これを踏ま え、通常的环境設計に際して、情報 環境にも配慮が必要となることを 主張した(110～121 頁)。
2.現代の環境認知	共著	昭和 57 年 8 月	(財)環境文化研究所、昭 和 56 年度自主研究報 告書「生活環境の新視 点に関する研究」	メディアの発達が生活環境の諸 側面に与える影響について、モビリ ティの向上と環境のポータビリテ ィの拡大を軸に検討した(132～138 頁)。本稿は、山田の草稿に荒井が 全面的に加筆する形で共同執筆し たため、本人担当部分抽出不可能。 共著者：荒井良雄、山田晴通。
3.景観としての会津の山 河	単著	昭和 59 年 3 月	(財)環境文化研究所、昭 和 58 年度自主研究報 告書「会津盆地の景観 と地域形成」	会津盆地に分布する巡礼地の景 観と地元中学校の校歌に歌い込ま れた景観イメージの分析から、会津 地方の景観の中で磐梯山に与えら れる特殊な意味づけの構造を明ら かにした(46～48 頁)。
4.地域紙の広告機能の実 態に関する研究	単著	昭和 59 年 3 月	(財)吉田秀雄記念事業 財団、「助成研究報告 集」(昭和 58 年度・第 17 次)	長野県中南信地方に分布する日 刊地域紙を対象に、広告紙面の内容 分析を行い、各紙の立地する地域に おける媒体間の競争関係が、広告紙 面の内容に大きな影響を及ぼして いることを具体的資料によって示 した(227～240 頁)。
5.宮城県石巻市における 地域紙興亡略史—地域紙 の役割変化を中心に	単著	昭和 59 年 6 月 1 日	日本新聞学会、「新聞学 評論」第 33 号 (「レフリー」制度)	昭和初期から日刊地域紙が刊行 されていた石巻市について、各時代 ごとに地域紙の性格を整理し、戦時 統制などの施策や、テレビの普及な どが、地域紙の役割を変化させてき たことを示した(215～229 頁)。
6.新聞制作の現状と技術 革新	単著	昭和 59 年 10 月 20 日	山川出版社、「歴史と地 理」第 350 号	当時の新聞制作の技術革新と、そ の普及状況について概説し、新たな 技術の導入については、大企業(全 国紙)が先行するわけでは必ずし もなく、技術の性格によってはむしろ 地域紙や小規模県紙の方が先行 することを、オフセット印刷など C T S 化の過程を例にとって明らか にした(17～21 頁)。

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
7. 東北地方における日刊地域紙の立地	単著	昭和 60 年 4 月 25 日	東北地理学会、「東北地理」第 37 巻第 2 号（「レフリー」制度）	東北地方に立地する日刊地域紙を各種の資料によって捕捉し、その分布状況の含意を、主読紙（全国紙および県紙）の配布競合状況と関連づけながら分析した(95～111 頁)。
8. 日刊地域紙の系列展開—東北地方の二つの事例	単著	昭和 60 年 6 月 25 日	日本地理教育学会、「新地理」第 33 巻第 1 号（「レフリー」制度）	わが国では事例の少ない日刊新聞のチェーン所有について、東北地方の二つの事例（岩手日日グループ、石巻かほく）の実態を紹介し、グループ内の力関係の違いから、発行される新聞の性格などに違いが生じることを指摘した(30～41 頁)。
9. 地理学におけるメディア研究の現段階—「情報の地理学」構築のために	単著	昭和 61 年 2 月 1 日	日本地理学会、「地理学評論」(Ser. A)第 59 巻第 2 号（「レフリー」制度）	人文地理学分野に蓄積されてきたマス・メディアの空間的展開に関する研究を、わが国と英米を中心に網羅し、展望した(67～84 頁)。
10. 商業施設としてのニュータウン近隣センターの現状と問題点—多摩ニュータウンの事例から	単著	昭和 61 年 12 月 20 日	松商学園短期大学、「松商短大論叢」第 35 号	多摩ニュータウンを例として、計画的に配置された最も身近な商業施設のある近隣センターが、当初の計画意図通りには機能していない現状を指摘し、その原因について考察した（79～103 頁）。
11. 時間地理学の展開とマーケティング論への応用の可能性	単著	昭和 62 年 12 月 20 日	松商学園短期大学、「松商短大論叢」第 36 号	時間地理学の基本的なコンセプトを英文論文の紹介を通して説明し、さらにそのアイデアをマーケティング論へ応用する可能性について検討した（1～37 頁）。
12. CATV 自主放送のルーツ—郡上八幡テレビの三年を支えたもの	単著	昭和 63 年 1 月 1 日	(社)東京社、「季刊・総合ジャーナリズム研究」第 123 号	わが国で最初に自主放送を行った CATV として知られている岐阜県郡上八幡町の「郡上八幡テレビ」の実態について、当時の関係者へのインタビューや一次資料によってその全体像を描いた。その結果、自主放送の運営が採算性を度外視した関係者の社会活動であったことが明らかになった(44～53 頁)。
13. ヤマスの都市—日英のビデオ・クリップに見る《香港》のイメージ	単著	昭和 63 年 3 月 23 日	東京大学教養学部教養学科イギリス科、「こすもす」第 10 号	1984 年、ほぼ同時期に制作された日英のビデオ・クリップ作品、「HIGHLY STRUNG」と「熱視線」を比較し、同じロケーション、同じ素材を扱いながら両者の間に生じている表現の違いを整理し、その原因を検討した(41～46 頁)。

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
14. 日刊地域紙を概観する—経営的変化の素描	単著	昭和 63 年 6 月 1 日	日本新聞協会、「新聞研究」第 443 号	日刊地域紙の全国的概況を経営面を中心に概観し、チェーン所有の進行や技術革新などに付随する問題点を指摘した(48~54 頁)。
15. 「汝の敵を知れ」—戦時下のナショナル・ジオグラフィック・マガジンが描いた「敵国」日本	単著	昭和 63 年 8 月 1 日	古今書院、「地理」第 33 巻第 8 号	米国を代表する一般向け地理学雑誌「ナショナル・ジオグラフィック・マガジン」に、第二次世界大戦中に掲載された日本に関する記事を取り上げ、内容を要約・紹介するとともに、その背後にある当時の米国知識人層の日本人観の一端を分析した(110~116 頁)。
16 「村のニューメディア」農村型CATV	単著	昭和 63 年 11 月 1 日	古今書院、「地理」第 33 巻第 11 号	農村型CATVの典型例として、MPIS 施設のある長野県東筑摩郡朝日村の状況を詳しく紹介した(40~48 頁)。
17. CATV事業の存立基盤	単著	平成元年 3 月 15 日	松商学園短期大学、「松商短大論叢」第 37 号	わが国におけるCATVの発達経過を歴史的に展望し、CATVが立地する地域の性格によって、CATVの存在を支える基盤には違いがあり、結果的に存立基盤の違いはCATVの性格に反映されることを明らかにした(3~68 頁)。
18. JCTVの事業展開と経営的成功の背景	単著	平成元年 4 月 30 日	日本新聞学会、「新聞学評論」第 38 号 (「レフリー」制度)	東京都心部において電電公社回線を利用した映像ネットワークをいち早く構築し、またわが国最初の本格的チャンネル・サプライヤーとしてCNNの供給を行っているJCTVの発展経過を概観した。その上で、JCTVの経営的成功の背景にあったマーケティング戦略上の特徴について検討を加えた(138~151 頁)。
19. 情報から地理を考える	単著	平成元年 8 月 10 日	帝国書院、「地理・地図資料」第 32 号	情報をキーワードとして地理的現象にアプローチする方法について、近年における東京への一極集中化現象の分析を例に概説した(1~3 頁)。
20. ビデオ・クリップに描かれた「アジア」—1983 年前後におけるイギリスのビデオから	単著	平成 3 年 3 月 15 日	松商学園短期大学、「松商短大論叢」第 39 号	1983 年前後にイギリスで制作された「アジア」に取材したビデオ・クリップ作品を比較検討し、そこに描かれた「アジア」の姿の背景にある、当時のイギリスの情勢について考察した(53~80 頁)。

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
21.映画“RUDE BOY” を読む、あるいは、誠実な 若さについて	単著	平成 2 年 3 月 26 日	東京大学教養学部教養 学科イギリス科、「こす もす」第 11 号	1970 年代末の英国における若者 文化を捉えたセミ・ドキュメンタリ ー映画作品“RUDE BOY”を対象 に、映像構成の特徴を述べ、その含 意を検討した(38～45 頁)。
22. ビデオ・クリップに 描かれた「アジア」— 1983 年前後におけるイ ギリスのビデオから	単著	平成 3 年 3 月 15 日	松商学園短期大学、「松 商短大論叢」第 39 号	MTV の初期にあたる 1983 年前 後に、英国で「アジア」に取材した ビデオ・クリップを制作することが ブームとなった時期に焦点を当て、 作品を比較検討し、そこに描かれた ステレオタイプの要素を多数含む 「アジア」の姿を整理して紹介する とともに、そのような表現の背景に ある、当時の英国の情勢について考 察した (53～80 頁)。
23.地域メディアの選挙 報道	単著	平成 3 年 6 月 1 日	日本新聞協会、「新聞研 究」第 479 号	平成 3 年の春の統一地方選挙時 における長野県中信地方の地域メ ディアを例に、日刊地域紙やCAT Vによる選挙報道の特質を検討し た (14～16 頁)。
24. 沖縄県宮古島におけ る地域メディアの現状と 住民意識	共著	平成 4 年 3 月 15 日	松商学園短期大学、「松 商短大論叢」第 40 号	沖縄県宮古島において、その孤立 性から独自の発展をみた地域メデ ィアの現況をまとめ、住民意識のあ り方との関係を考察した。全文 34 頁中、担当：「はじめに」(60～63 頁)、I. 「日刊地域紙の状況」(63～ 68 頁)、「おわりに」(87～89 頁)。 共著者：山田晴通、音好宏、藤田高 弘。
25. 田舎と都会の間、あ るいは、『あの日の僕をさ がして』を見て	単著	平成 4 年 9 月 1 日	古今書院、「地理」第 37 巻第 9 号	テレビ・ドラマ『あの日の僕をさ がして』を素材に、ストーリーや演 出の内容を分析し、ドラマ制作の過 程において、現実の地方の姿とは異 なる、都会側の視点から捉えられた 田舎のイメージが形成されること を論じた(32～38 頁)。
26. 「小規模紙」からみ る新聞経営	単著	平成 4 年 9 月 30 日	日本新聞協会、「新聞経 営」第 120 号	地域紙や、第二県紙、一部の都市 型夕刊紙など、発行部数が十萬部に 満たない日刊紙、いわゆる「小規模 紙」について、新聞経営上の構造的 問題を整理し、当時のメディア環境 の変化の中で、経営上の課題となり うる問題を整理し、包括的に論じた (35～38 頁)。

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
27. 長野県山形村における地域情報化の展開と住民の「地域」活動	共著	平成 5 年 3 月 15 日	松商学園短期大学、「松商短大論叢」第 41 号	当時、農村型CATVが存在した長野県山形村において、CATV導入を一つの契機として始まったボランティアな組織（CATV番組制作集団「ホワイトバランス会」と、若者集団「トライ・カンパニー」）の実態を参与観察などの手法によって明らかにした。全文 84 頁中、担当：「はじめに」(96～99 頁)、I. 「社会的コンテクストとしての山形村」のうち 1. 「山形村の概況」(100～105 頁)、II. 「ホワイトバランス会」(117～136 頁)、「おわりに」(156～165 頁)。共著者：山田晴通、阿部潔、是永論。
28. 地理学におけるエスニシティ研究によせて、あるいは、板前は包丁を研ぐ	単著	平成 5 年 8 月 1 日	古今書院、「地理」第 38 巻第 8 号	地理学的立場から展開されるエスニシティ研究について、エスニシティ概念の吟味が不十分であることを指摘した(80～85 頁)。
29. 地理学徒として社会学にむきあう、あるいは、空間理論研究の夢想	単著	平成 6 年 3 月 15 日	松商学園短期大学、「松商短大論叢」第 42 号	都市社会学におけるニュー・アーバン・ソシオロジーと、経済地理学における空間編成論について、わが国における研究状況を批判的に検討した(143～170 頁)。
30. 北米日系新聞関係日本語文献表(第 1 稿)	単著	平成 6 年 3 月 15 日	松商学園短期大学、「松商短大論叢」第 42 号	北米日系新聞に関する邦文文献を集成し、この分野における研究の現況をまとめるとともに、解説を付けた文献表を作成した(255～295 頁)。
31. 阪神大震災-その翌日	単著	平成 7 年 3 月 1 日	古今書院、「地理」第 40 巻第 3 号	阪神大震災発生翌日の市民生活の実態について、現地踏査の成果をまとめた(16～20 頁)。
32. 阪神大震災(兵庫県南部地震)踏査報告-1995年1月18日(発生2日目): 西宮市・芦屋市・神戸市東灘区	単著	平成 7 年 3 月 15 日	松商学園短期大学、「松商短大論叢」第 43 号	上記 29. に大幅な加筆をした上、写真多数を加えた現地踏査の報告。被災地における住民の行動の特徴を整理し、防災の立場からの問題提起をした(165～205 頁)。
33. 「地域のコミュニケーション」という視点	単著	平成 7 年 6 月 15 日	東京経済大学、「コミュニケーション科学」第 3 号	コミュニケーション論における「地域」をめぐる議論を包括的に整理していくことをめざして、概念の整理をした(53～64 頁)。

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
34. 地域情報化 (その1～3)[3回連載]	単著	平成7年 10月1日 11月1日 12月1日	古今書院、「地理」第40 巻第10号～12号	連載シリーズ「検証日本の地域振 興」の一部として、1980年代以降 の「地域情報化」関連の諸施策を批 判的に検討した（第10号、75～ 79頁；第11号、84～89頁；第12 号、94～97頁）。
35. カルチュラル・スタ ディーズをどうとらえる か	単著	平成9年2月17 日	東京経済大学、「コミュ ニケーション科学」第6 号	インターネット上にホームペー ジを開設している日本の大学につ いて、ページを広報機能の点から評 価し、概況の計数的な把握を試みた (107～117頁)。
36. 地域	単著	平成9年1月31 日	日本マス・コミュニケ ーション学会「マス・ コミュニケーション研 究」第50号	「特集 現代マス・コミュニケ ーション理論のキーワード」の一部と して、「地域」をめぐるコミュニケ ーション論の議論の流れを整理し、新 たな地域コミュニケーション論の 再構築が求められることを指摘し た(16～23頁)。
37. ホームページを利用 した日本の大学の広報活 動の概況	単著	平成9年2月17 日	東京経済大学、「コミュ ニケーション科学」第6 号	インターネット上にホームペー ジを開設している日本の大学につ いて、ページを広報機能の点から評 価し、概況の計数的な把握を試みた (107～117頁)。
38. 個人研究室で管理す るインターネットサーバ の運用とサイトの構築- 文系の視点で語る camp.ff.tku.ac.jp の実 践	単著	平成10年2月16 日	東京経済大学、「コミュ ニケーション科学」第8 号	パソコンをサーバとしてインタ ーネットに接続し、サイトを構築し ていく上での諸問題を、技術的側面 以外の部分に重点を置いて、整理し た(115～128頁)。
39. 多メディア・多チャ ンネル時代における日本 の地方民放テレビ局の動 向	単著	平成10年3月11 日	東京経済大学、「東京経 済学会誌-経営学-」第 208号	1980年代後半以降、衛星技術に よって多メディア・多チャンネル化 が進行し始めた日本のテレビ業界 の現状をまとめ、特に県域レベルを 対象としてきた地方民放テレビ局 の動向について、注目すべき事例に 焦点を当てながら論じた(113～ 128頁)。 なお、本論文は、韓国・釜山大学 言論情報研究所「オンロングァチ ョンボ(言論と情報)」第4号に、韓国 語訳が掲載された。

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
40.新聞界の「先端」から 学ぶこと-大不況下にお ける小規模紙経営]	単著	平成 10 年 12 月 1 日	日本新聞協会、「新聞研 究」第 569 号	1990 年代のいわゆる大不況期に おいて、経営基盤の弱い小規模の新 聞が、どのような経営環境におかれ ているかを概観した。特に、都市部 の夕刊紙や「第二県紙」としての性 格を持った。県域紙の経営が厳しい こと、これとは対照的に地域紙の経 営が堅調なことを指摘した(29～32 頁)。
41. 昭和初期の長野県松 本市における小規模日刊 紙-紙面からみた「朦朧新 聞」の実態	単著	平成 11 年 1 月 30 日	東京経済大学、「人文自 然科学論集」第 107 号	昭和初期において全国的にも珍 しく多数の日刊地域紙が刊行され ていた長野県松本市の状況を踏ま え、当時の小規模日刊紙の実態を、 紙面分析によって具体的に明らか にした。(13～36 頁)
42. globe : 小室哲哉の歌 詞が描き出す世界	単著	平成 11 年 3 月 1 日	国立音楽大学、「音楽研 究/大学院研究年報」第 11 号	小室哲哉が globe の楽曲として作 詞・作曲した作品の歌詞にみられる 特徴について分析し、その背後にあ る戦略性や価値観について論じた (165～205 頁)。
43. FM西東京にみるコ ミュニティFMの存立基 盤	単著	平成 12 年 9 月 28 日	東京経済大学、「人文自 然科学論集」第 110 号	わが国におけるコミュニティ放 送制度の歴史的背景を検討した上 で、当時の田無市(現在の西東京市 の一部)のコミュニティ放送局であ ったFM西東京を例に、経営基盤や ボランティヤ・スタッフの活動実態 などの実態を明らかにするととも に、コミュニティ形成過程にコミュ ニティ放送制度がどのように関わ る可能性があるのかという論点を 提起した(59～84 頁)。
44. <幻のコミュニン> が形成される-「デジタル 時代」の地域社会	単著	平成 13 年 2 月 1 日	日本新聞協会、「新聞研 究」第 595 号	デジタル技術の浸透による地域 社会のコミュニケーション過程の 変質について、メディア論的観点か ら検討し、デジタル技術時代におけ る地域社会の将来像についての論 点を整理した(63～66 頁)。
45. 富山県山田村のコン ピュータ利用状況調査 (速報資料)	共著	平成 13 年 6 月	愛知教育大学「地理学 報告」第 92 号	地域情報化の先進地域として、全 戸にパソコンを支給するという政 策を実施していた当時の富山県山 田村(現在の富山市の一部)におい て、質問紙法による利用実態調査を 実施した結果の速報報告(44～49 頁)。

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
46.地域の情報化から、地 域の再構成へ	単著	平成 13 年 10 月 31 日	東京経済大学、「コミュ ニケーション科学」第 15 号	1980 年代における地域情報化政 策以降、インターネットの普及期に 至る近年の動向を踏まえ、何らかの 意味での地域性を帯びたメディア の展開が、地域におけるコミュニテ ィの変質に関わる可能性について 論じた (71~87 頁)。
47. 英国ミルトン・キ ーンズ市の地域計画 (ロー カル・プラン) 策定作業	単著	平成 14 年 1 月 31 日	東京経済大学、「人文自 然科学論集」第 113 号	英国において最大規模のニュー タウンとして開発されてきたミル トン・キーンズ市が、保守党政権下 のニュータウン開発法人の整理後、 通常の自治体として最初に策定す ることとなった地域計画 (ローカル ・プラン) の策定過程を整理し、そ の内容が、どのような意味で従前の ニュータウン開発構想を受け継ぎ、 どのような意味で、従来とは異なる 独自性をもっているのかを検討し た。(69~85 頁)。
48. バートン・クレ ーン 覚書	単著	平成 14 年 11 月 30 日	東京経済大学、「コミュ ニケーション科学」第 17 号	昭和初年に、日本で英字新聞記者 として活躍し、かつまた流行歌歌手 として多数の録音を残し、さらに戦 後の占領期に特派員として日本で 再度活躍した米国人バートン・クレ ーンについて、その歌手としての事績 とジャーナリストとしての事績を おもに文献資料の整理を通して検 討した (191~227 頁)。
49. Penetration of the Internet into the Japanese society	共著	平成 14 年 12 月	Universite de Montpellier III 「 NETCOM: Networks and Communication Studies」16(3/4)	日本におけるインターネットの 普及過程を、特に携帯電話の普及と の関連を重視しながら説明し、欧米 諸国とは異なった事情の中で、日本 独自の普及過程、利用状況が見られ ることを示し、その意義について検 討した(135~154 頁)。本稿は、荒 井・箸本が分担して作成した草稿に 山田が全面的に加筆しつつ英訳作 業をする形で共同執筆したため、本 人担当部分抽出不可能。共著者：荒 井良雄、箸本健二、山田晴通
50. 百周年を迎えるレッ チワース田園都市—姫野 侑教授の「研究ノート」 によせて	単著	平成 15 年 3 月 20 日	東京経済大学、「東京経 済学会誌—経営学—」 第 43 号	姫野侑が英国の田園都市につい て発表した一連の「研究ノート」の 内容を整理し、その後の事態の展開 と、田園都市の管理組織の運営形態 について考察した (27~40 頁)。

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行または 発表の年月日	発行所、発表雑誌等ま たは発表学会等の名称	概 要
51.オーストラリアにお ける多文化主義の背景	単著	平成 15 年 4 月 20 日	山川出版社、「歴史と地 理」第 563 号	オーストラリア社会の特徴を、移 民国家であり様々な民族集団が存 在することに注目し、諸統計を参照 しながら検討した (23～31 頁)。
52. インターネット時代 の社会関係	単著	平成 15 年 7 月 25 日	明治生命フィナンシ ュアランス研究所「 FINANSURANCE フ ィナンシユアランス」	インターネットが普及した以降 の時代において、インターネットや 携帯電話といった新たなコミュニ ケーション技術が、人々の社会関係 をどのように変化させていく可能 性があるのかを考察した (17～28 頁)。
53. オーストラリアの地 方都市アーミデールにお けるコミュニティ放送と ナローキャスティング	単著	平成 17 年 8 月 1 日	日本地理学会、「地理学 評論」第 78 巻第 9 号 (「レフリー」制度)	オーストラリアにおけるコミュ ニティ放送制度の概要を紹介する とともに、地方小都市においてコミ ュニティ放送と、それに準じた内容 の放送を行うナローキャスティ ングとが、地域社会へのサービスにお いて、どのように機能を分担してい るかを検討した (545～559 頁)。